

自己肯定感と人とのかかわり

Effects of Self-Affirmation on Interpersonal Relationships

久芳 美恵子 竹村 美砂*

* 元都立目黒高校

はじめに

他者とのかかわり方が未熟な子どもの増加は、多くの学校関係者の指摘するところである。「貸して」と言わず友だちの物を使う、人から何かしてもらっても「ありがとう」と言えない、唐突としか思えないような状況で感情の爆発を起こす等、このような子どもは校種を問わず今日特異な存在ではない。また、失敗を恐れて初めからやらない、一寸つまずくと途中で止めてしまう等、自信のなさや自己肯定感の低さもうかがえる。自尊感情が対人関係能力に影響し、中でも自尊感情の一因子である自己肯定感の高い者は学校での他者とのかかわりや出来事への不安が生じにくいことが指摘されている(竹田&倉戸 2003)。

本研究では、高校生の自己肯定感と家族や友人、教師とのかかわりの関係を探ることを目的とする。

1 研究方法

1. 調査対象

都立及び県立高校1年～3年1245名
(1年412名 2年410名 3年423名
:男601名 女644名)

2. 調査方法:質問紙による意識調査(学級毎に実施)

時期:2000年6月～2001年6月

3. 調査内容:「自己評価」「友人とのかかわり」「家族とのかかわり」「教師とのかかわり」について各8設問、計32設問。

4. 結果の処理について

*各設問について、1「とてもそう」2「わりとそう」3「あまりそうではない」4「まったくそうではない」の4選

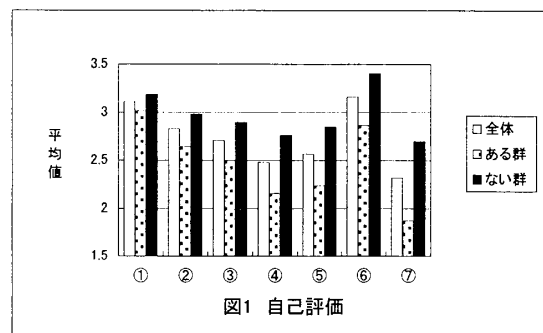
択肢を設定し、4選択肢を1点から4点として計算した。表及び図の数値は設問毎の平均値を示している。平均値は、いずれの設問においても値が小さいほど肯定回答が多いことを示す。

*さらに、「自己評価」の設問⑧「今の自分が好きだ」に、1「とてもそう」2「わりとそう」と回答した者576名46.3%を自己肯定感のある群(以下、「ある群」)、3「あまりそうでない」4「まったくそうでない」と回答した669名53.7%を自己肯定感のない群(以下、「ない群」として比較した。

「今の自分が好きだ」と思える自己肯定感の「ある群」の割合は、男子49.8%、女子43.0%であり、学年では1年が49.5%、2年43.4%、3年45.9%といずれも半数を下回っていた。

II 結果

1. 自己評価



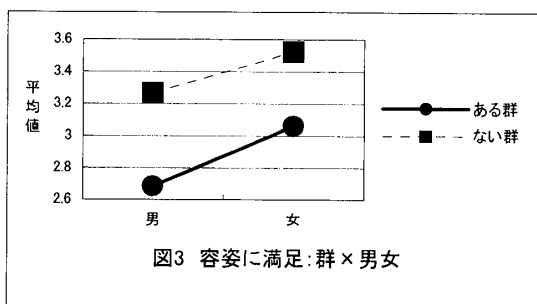
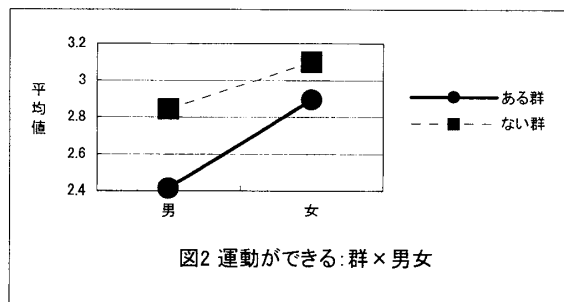
全設問の平均値は 2.32～3.11 であり、設問に対する肯定感が低い。⑦「自分には『自分らしさ』というものがある」が 2.32 で最も肯定感が高い。①「成績がよい」、⑥「容姿に満足」は平均値が 3 を超え否定感が高く、②「運動ができる」、③「人に好かれる」も否定傾向にある。

(1) 「ある群」×「ない群」

全7設問で1%水準 ($p < 0.01$) の有意差があり、「ない群」が全ての設問により否定的であった。

(2) 「ある群」「ない群」×男女

「ある群」では7設問中5設問、「ない群」では2設問で男女に有意差 ($t = 2.58$ $p < .01$) があった。いずれも男子が肯定的である。②「運動ができる」⑥「容姿に満足している」では両群で、さらに③「人には好かれる」④「自分には良いところがある」⑤「誰にも負けないものがある」では、「ある群」女子が男子に比べて有意に肯定感が低い。女子の自己評価は自己肯定感のある者でも男子より顕著に低く、運動と容姿については「ない群」女子が極めて低い。



(3) 「ある群」「ない群」×男女×学年

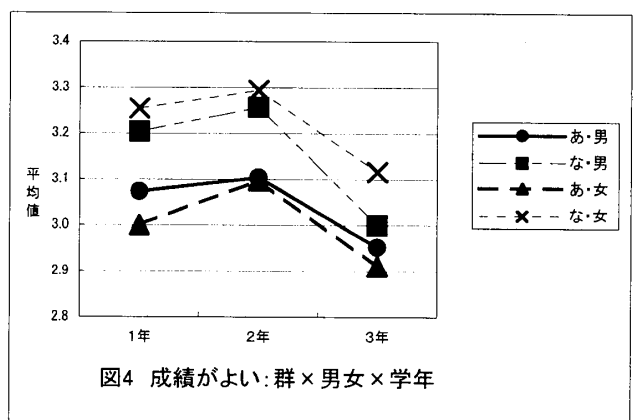
①「成績がよい」は両群男女ともに2年で否定傾向が強まるが、3年でやや持ち直す。特に「ない群」男子で3年が1・2年に比べて有意 ($F = 3.51$ $p < .05$) となっている。また、「ある群」の3年男子は⑤「誰にも負けないも

のがある」で1・2年に比べて有意 ($F = 4.96$ $p < .01$) に肯定的である。

表1 自己評価: 平均値・標準偏差 (SD) と検定結果

** $p < 0.01$ * $p < 0.05$

自己評価	ある群		ない群		群×性別		
	平均値	SD	平均値	SD	男	女	
① 成績がよい	3.02	0.79	3.19	0.66	ある	3.05	2.99
	t=2.58**		ない		3.16	3.22	
② 運動ができる	2.65	0.88	2.99	0.82	ある	2.41	2.89
	t=2.58**		ない		0.85	0.88	
③ 人に好かれる	2.50	0.68	2.90	0.62	ある	2.41	2.60
	t=2.58**		ない		0.71	0.69	
④ 良い所がある	2.16	0.69	2.77	0.69	ある	2.08	2.25
	t=2.58**		ない		0.81	0.68	
⑤ 誰にも負けない所がある	2.24	0.9	2.85	0.82	ある	2.12	2.37
	t=2.58**		ない		0.97	0.87	
⑥ 容姿に満足	2.87	0.76	3.41	0.58	ある	2.69	3.06
	t=2.58**		ない		0.78	0.72	
⑦ 自分らしさがある	1.88	0.73	2.70	0.81	ある	1.85	1.91
	t=2.58**		ない		0.71	0.53	



以上、主な結果は次の通りである。

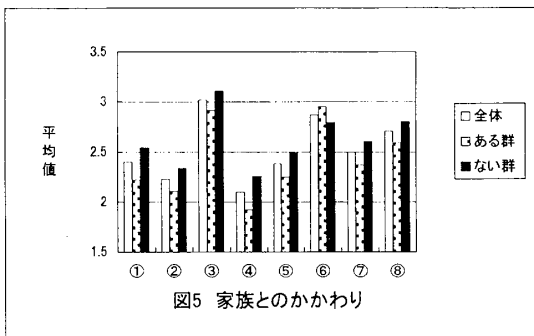
・自己評価は、全設問で否定的傾向にあるが、成績や容姿といった他者との比較が容易な事柄では特に評価が低い。

・「今の自分が好きだ」と思える自己肯定感の「ある群」は、自己評価の他の側面も肯定的である。

・「ある群」では7設問中5設問で、「ない群」では2設問で、女子の自己評価は男子より有意に低い。特に、運動と容姿については著しい。

・「成績がよい」の設問に学年との関係がみられた。

2. 家族とのかかわり



肯定感が高いのは、④「信頼している」②「友達のように会話をする」であった。一方、肯定感が低いものは、③「悩み事を話す」⑧「家の手伝いをする」であった。

(1) 「ある群」×「ない群」

「ある群」が全設問(⑥は反転)で有意($P < .01$)であった。自己肯定感のある者は、家族とのかかわりがよいと言える。

(2) 「ある群」「ない群」×男女

男女差をみると、④「信頼している」⑦「きょうだいで話す」の「ある群」を除き、他の設問では両群共に有意差がみられた。いずれも女子が男子より肯定的で、家族との関係が密である。

(3) 「ある群」「ない群」×男女×学年

学年差は3設問でみられた。①「朝や寝の前に家族に挨拶をする」は、「ある群」の女子以外の3群で

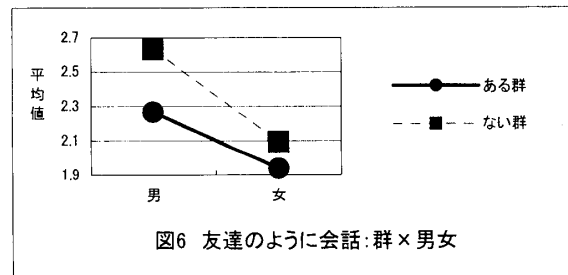
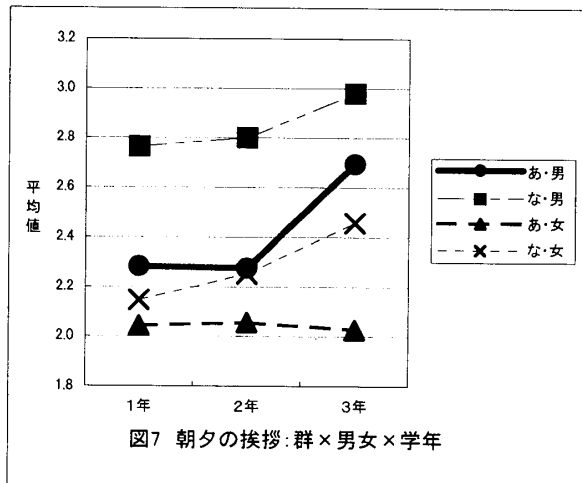


表2 家族とのかかわり: 平均値・SDと検定結果

家族とのかかわり			群×性別	
	ある群	ない群	男	女
① 朝夕、挨拶をする	2.22 SD 1.05 t=2.58**	2.54 1.03	ある 2.39 SD 1.09 t=2.58** ない 2.85 SD 0.99 t=2.58**	2.04 0.99 2.29 1.00
② 友達のように会話する	2.11 SD 0.88 t=2.58**	2.34 0.92	ある 2.26 SD 0.93 t=2.58** ない 2.63 SD 0.90 t=2.58**	1.94 0.83 2.09 0.87
③ 悩みを話す	2.91 SD 0.93 t=2.58**	3.11 0.84	ある 3.15 SD 0.82 t=2.58** ない 3.34 SD 0.76 t=2.58**	2.66 0.96 2.92 0.86
④ 信頼している	1.92 SD 0.82 t=2.58**	2.26 0.83	ある 1.96 SD 0.80 t=2.58** ない 2.42 SD 0.80 t=2.58**	1.87 2.13 0.79
⑤ 学校のことを話す	2.25 SD 0.93 t=2.58**	2.50 0.93	ある 2.52 SD 0.88 t=2.58** ない 2.83 SD 0.92 t=2.58**	1.95 0.88 2.22 0.88
⑥ 自分からは話をしない	2.95 SD 0.83 t=2.58**	2.79 0.80	ある 2.73 SD 0.82 t=2.58** ない 2.56 SD 0.77 t=2.58**	3.19 0.80 2.99 0.77
⑦ きょうだいで話す	2.37 SD 1.15 t=2.58**	2.60 1.16	ある 2.41 SD 1.09 t=2.58** ない 2.79 SD 1.09 t=2.58**	2.32 1.18
⑧ 家の手伝いをする	2.59 SD 0.85 t=2.58**	2.81 0.80	ある 2.68 SD 0.85 t=2.58** ない 3.01 SD 0.80 t=2.58**	2.49 0.85 2.64 0.77

は学年進行とともに挨拶をしなくなる者が増加する。特に「ある群」男子では、1・2年に比べ3年で有意($F = 4.61$ $p < .01$)であり、「ない群」女子でも1年に比べ3年で有意($F = 3.09$ $p < .05$)であった。



また、④「信頼している」は、「ない群」男子で1年より2・3年が有意($F = 6.68$ $p < .01$)に親への信頼が増加しており、⑧「家の手伝い」では、学年進行とともに手伝いの増加がみられるが、特に「ない群」女子では1年より3年で有意($F = 3.53$ $p < .05$)である。

以上、主な結果は次の通りである。

- ・親への信頼度は高く、親と友達のように会話をする一方、悩み事を話すことには否定的である。
- ・自己肯定感の「ない群」より「ある群」で、また男子より女子で親とのかかわりがよく、家族との関係は「ある群」の女子で最も密接である。
- ・学年との関係は「朝夕の挨拶」にみられ、学年進行につれ、家族への挨拶をしなくなる傾向がある。

3 友人とのかかわり

④「友人というより、一人の方が気持ちが落ち着く」(以下「一人が落ち着く」) 2.63と③「異性の友人と気軽に話をする」2.57以外の設問は、その平均値が1.88～2.36と肯定的であり、特に⑧「友人になったら、その関係は長く続く」は1.88で肯定感が高い。

(1)「ある群」×「ない群」

両群間の有意差は4設問あり、①「自分から話しかける」、③「異性の友人と気軽に話をする」⑧「友人になったら、その関係は長く続く」の3設問では「ある群」が有意($t = 2.58$ $p < .01$)に肯定感が高い。一方、②「友人の意見や行動に合わせる」は「ない群」が肯

定しており、有意($t = 1.96$ $p < .05$)である。

(2)「ある群」「ない群」×男女

男女での有意差は5設問でみられた。

「ある群」では②「友人の意見や行動に合わせる」④「一人が落ち着く」でいずれも男子でその傾向が強い。「ない群」では、①「自分から話しかける」、③「異性の友人と気軽に話をする」、⑥「頼みごとをされると、嫌でも断れない」の3設問で女子が、④「一人が落ち着く」では男子が有意に肯定的であった。自己肯定感のあるなしにかかわらず、男子は女子に比べ友人というより一人の方が落ち着く傾向がある。また、②「友人の意見や行動に合わせる」傾向は、「ある群」男子と「ない群」男女で強く、「ある群」では男女差が有意であった。⑥「頼みごとをされると、嫌でも断れない」は、「ない群」で有意差があり、その傾向は女子に強い。

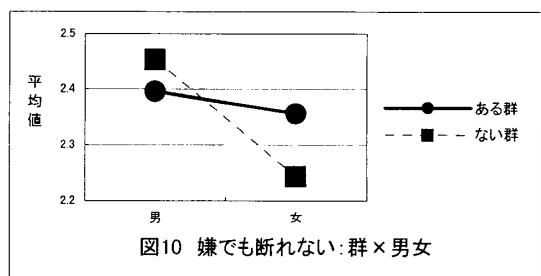
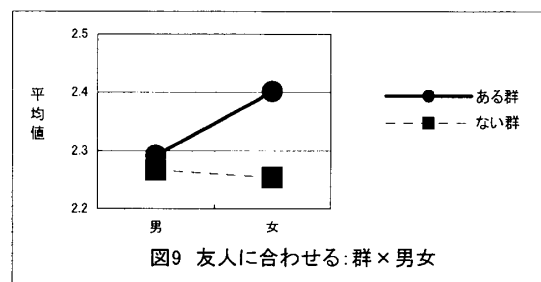
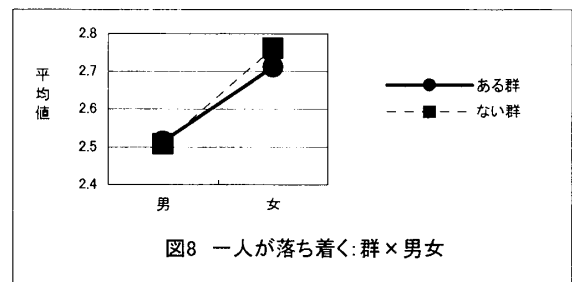


表3 友人とのかかわり: 平均値・SDと検定結果

**p<0.01 *p<0.05

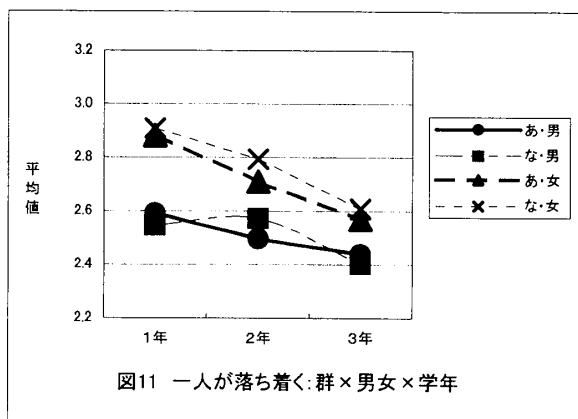
友人とのかかわり	ある群		群×性別			群×男女×学年					
	ある群	ない群		男	女	あ・男	1年	2年	3年	有意差	
① 自分から 話しかける	2.06	2.30	ある SD t=2.58**	2.10	2.01	あ・男	2.11	2.12	2.06		
	SD 0.67	0.68				あ・女	1.92	2.08	2.04		
				ない	2.40	2.22	な・男	2.49	2.26	2.47	
				SD t=2.58**	0.69	0.64	な・女	2.06	2.21	2.35	F=6.37**
② 友人に合わせる	2.34	2.26	ある SD t=1.96*	2.29	2.40	あ・男	2.23	2.38	2.27		
	SD 0.64	0.61				あ・女	2.39	2.46	2.37		
				ない	2.27	2.25	な・男	2.29	2.20	2.32	
				SD t=1.96*			な・女	2.18	2.34	2.23	
③ 異性と気軽に話す	2.42	2.69	ある SD t=2.58**	2.45	2.39	あ・男	2.48	2.50	2.35		
	SD 0.85	0.80				あ・女	2.38	2.39	2.40		
				ない	2.80	2.60	な・男	2.90	2.68	2.82	
				SD t=2.58**	0.82	0.80	な・女	2.62	2.49	2.71	
④ 一人が 落ち着く	2.61	2.65	ある SD t=2.58**	2.52	2.71	あ・男	2.59	2.50	2.44		
						あ・女	2.88	2.71	2.57	F=3.47*	
				ない	2.51	2.76	な・男	2.55	2.57	2.40	
				SD t=2.58**	0.81	0.80	な・女	2.91	2.79	2.61	F=4.44**
⑤ グループより 少人数	2.14	2.16	ある SD t=2.58**	2.18	2.10	あ・男	2.26	2.05	2.23		
						あ・女	2.21	2.10	2.00		
				ない	2.16	2.15	な・男	2.17	2.09	2.23	
				SD t=2.58**			な・女	2.29	2.18	2.01	F=4.21**
⑥ 嫌でも断れない	2.38	2.34	ある SD t=2.58**	2.40	2.36	あ・男	2.37	2.40	2.43		
						あ・女	2.34	2.35	2.37		
				ない	2.45	2.24	な・男	2.51	2.41	2.45	
				SD t=2.58**	0.77	0.74	な・女	2.21	2.31	2.20	
⑦ 相手や場面で 変わる	2.39	2.34	ある SD t=2.58**	2.39	2.39	あ・男	2.38	2.39	2.39		
						あ・女	2.40	2.49	2.31		
				ない	2.31	2.37	な・男	2.25	2.34	2.33	
				SD t=2.58**			な・女	2.35	2.44	2.33	
⑧ 友人関係は 長く続く	1.75	1.99	ある SD t=2.58**	1.74	1.76	あ・男	1.61	1.86	1.77	F=5.45**	
	SD 0.57	0.63				あ・女	1.72	1.79	1.76		
				ない	2.03	1.95	な・男	2.00	1.98	2.12	
				SD t=2.58**			な・女	1.86	1.94	2.04	

(3)「ある群」「ない群」×男女×学年

学年間の差は4設問で見られた。④「一人が落ち着く」は、学年進行とともにそう思う者が増加するが、特に女子では「ある群」(F=3.47 p<.05) 及び「ない

群」(F=4.44 p<.01) でいずれも有意差があり、1年より3年で一人である方が落ち着く傾向が強まる。

⑧「友人になったら、その関係は長く続く」は、両群男女共に3年で肯定回答が低くなる。特に「ある群」男子



では1年と3年の間では有意差 ($F=5.45$ $p<.01$) がみられた。

また、「ない群」女子では、1・2年に比べ3年で①「自分から話しかける」では肯定感が減り ($F=6.37$ $p<.01$)、⑤「グループでいるより、少人数の方が付き合いやすい」では肯定感が上昇し ($F=4.2$ $p<.01$) いずれも有意であった。自分から話しかけることが減り、一人が落ち着き、少人数の友人という方がよいと思ようになる傾向が、「ない群」の女子で学年進行とともに顕著となる。

以上、主な結果は次の通りである。

- ・友達には自分から話しかける積極性をもち、友人関係の継続を信じる一方で、「友人の意見や行動に合わせ」、「嫌でも頼みごとを断れない事があり」、「少人数の方が付き合い易い」と思うなど、友人に気を使っている。

- ・自己肯定感の「ある群」は、「友達に自分から話し掛け」、「異性の友人とも気軽に話し」、「友人関係は長く続く」と思う等、友達とのかかわりは積極的である。一方、「ない群」は「友達に合わせる」意識が強い。

- ・「ない群」の男子は、自分から友達の話し掛けや、異性と気軽に話すことでは否定的である。女子は、「頼み事は嫌でも断れない」傾向が強い。

- ・一人である方が落ち着く傾向は、自己肯定感の有無にかかわらず男子で強く、性差の影響が大きい。女

子では学年が進むにつれて、一人の方が落ち着くと思う者が増え、自分から話しかけが少なくなる等、友人から引いてゆき、学年の影響が見られる。

4 教師とのかかわり

⑧「敬語で話す」2.01、②「会ったときに挨拶をする」2.2は肯定感が高い。一方、③「悩みや不安を聞いてもらう」は3.43と最も否定的で、①「よく話をする」2.8、⑦「わからない事は質問する」2.73も否定傾向にある。

(1)「ある群」×「ない群」

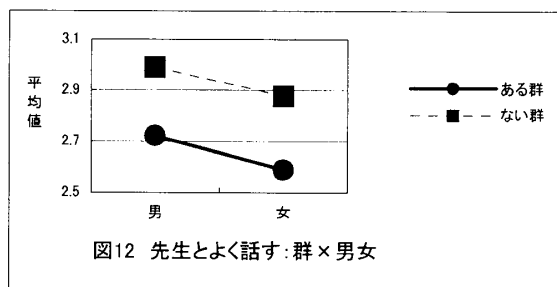
8設問中5設問で両群に有意差があった。

②「会ったときに挨拶をする」($t=2.58$ $p<.01$) ⑧「敬語で話す」($t=1.96$ $p<.05$)の2設問では「ある群」がより肯定的である。また、①「よく話す」⑤「信頼している」⑦「わからない事は質問する」では、いずれも「ない群」で否定傾向がより強い。

(2)「ある群」「ない群」×男女

4設問で有意差がみられた。①「よく話をする」⑥「先生の話は注意深く聞く」では両群ともに男女で有意差 ($t=1.96$ $p<.05$) があり、いずれも男子の方に否定感が強い。これに加えて「ない群」では、②「会ったときに挨拶する」⑤「信頼している」の2設問でも男子に否定感が強い。教師への挨拶や信頼、会話は、自己肯定感の「ない群」男子が最も少ない。

⑥「先生の話は注意深く聞く」は、性差が影響しており、男子に教師の話聞いていない傾向が強い。



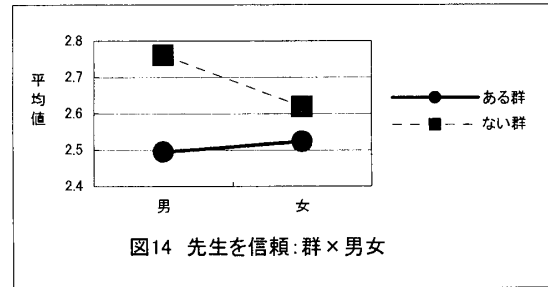
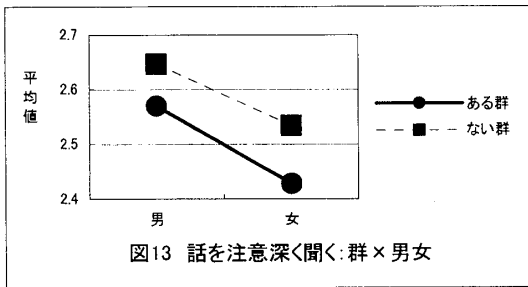


表4 教師とのかかわり: 平均値・SDと検定結果

**p<0.01 *p<0.05

教師とのかかわり	群 × 性別		群 × 男女 × 学年							
	ある群	ない群		男	女	1年	2年	3年	有意差	
① 先生とよく話す	2.66 SD 0.77 t=2.58**	2.93 0.66	ある	2.72	2.59	あ・男	2.82	2.68	2.65	
				0.74	0.75	あ・女	2.63	2.69	2.49	
			ない	2.99	2.88	な・男	2.96	3.11	2.89	
				0.69	0.68	な・女	3.07	2.77	2.82	F=6.81**
② 会うと挨拶する	2.05 SD 0.77 t=2.58**	2.33 0.76	ある	2.06	2.04	あ・男	2.08	1.96	2.17	
						あ・女	1.94	2.17	2.05	
			ない	2.41	2.26	な・男	2.29	2.41	2.53	
				0.86	0.71	な・女	2.15	2.24	2.38	F=3.26*
③ 悩みや不安を聞いてもらう	3.40	3.46	ある	3.42	3.37	あ・男	3.51	3.42	3.31	
						あ・女	3.43	3.42	3.29	
			ない	3.50	3.43	な・男	3.52	3.50	3.46	
						な・女	3.64	3.41	3.28	F=3.88**
④ 自分のことを話しにくい	2.43	2.35	ある	2.40	2.47	あ・男	2.37	2.36	2.51	
						あ・女	2.49	2.47	2.44	
			ない	2.36	2.34	な・男	2.29	2.33	2.46	
						な・女	2.19	2.36	2.44	
⑤ 先生を信頼	2.51 SD 0.83 t=2.58**	2.68 0.76	ある	2.49	2.52	あ・男	2.51	2.43	2.55	
						あ・女	2.51	2.60	2.49	
			ない	2.76	2.62	な・男	2.80	2.71	2.78	
				0.84	0.72	な・女	2.55	2.61	2.68	
⑥ 話を注意深く聞く	2.50	2.58	ある	2.57	2.43	あ・男	2.54	2.50	2.70	
				0.75	0.74	あ・女	2.27	2.54	2.49	F=3.41*
			ない	2.65	2.53	な・男	2.70	2.56	2.68	
				0.80	0.66	な・女	2.52	2.57	2.51	
⑦ 分からない事は質問する	2.60 SD 0.79 t=2.58**	2.85 0.71	ある	2.60	2.60	あ・男	2.63	2.59	2.58	
						あ・女	2.53	2.63	2.65	
			ない	2.89	2.81	な・男	2.96	2.89	2.83	
						な・女	2.85	2.84	2.76	
⑧ 敬語で話す	1.96 SD 0.77 t=1.96*	2.05 0.74	ある	1.91	2.01	あ・男	1.75	1.88	2.14	F=3.67**
						あ・女	1.87	2.08	2.09	
			ない	2.10	2.00	な・男	2.09	1.99	2.22	
						な・女	1.81	2.02	2.15	F=8.42**

(3)「ある群」「ない群」×男女×学年比較

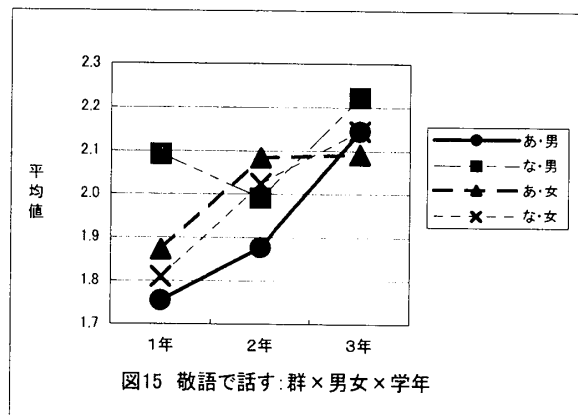


図15 敬語で話す・群×男女×学年

5設問で学年の有意差がみられた。⑧「敬語で話す」は、両群男女ともに学年進行に伴い肯定感が低くなる傾向にある。「ある群」男子 ($F=3.67$ $p<.01$) 3年が1・2年に対し有意であり、「ない群」女子 ($F=8.42$ $p<.01$) でも1年に対し2・3年が有意であった。これに加え、「ない群」女子では、「会ったときに挨拶する」($F=3.26$ $p<.05$)で1年より3年で減少し、①「先生とよく話す」($F=6.81$ $p<.01$)③「悩みや不安を聞いてもらう」($F=3.88$ $p<.01$)では3年で否定感が有意に減少する。

また、⑥「先生の話は注意深く聞く」では1年では最も肯定的であった「ある群」女子が、2・3年では肯定感が有意 ($F=3.41$ $p<.05$)に低下している。

以上、主な結果は次の通りである。

・教師とは、会った時に挨拶をする、敬語で話す等の表面的なかかわりはあるが、悩みや不安を教師に聞いてもらう者はごくわずかである。

・話を注意深く聞く、教師とよく話すのは、女子の傾向である。

・自己肯定感の「ある群」の教師とのかかわりは、「ない群」よりよい。

・教師に会った時の挨拶や信頼では、自己肯定感の「ない群」の男子で最も否定感が高い。

・敬語で話すことは、学年が強く関与する設問で、両

群男女ともに3年では敬語の使用は減少する。又、3年で、教師に挨拶をする者が減るが、話したり、悩みを聞いてもらうことへの否定感も減少する。この傾向は、特に自己肯定感の「ない群」の女子で顕著であり、教師との距離は学年進行とともに近づくようである。

III 考察

「今の自分が好きだ」と自己肯定できる者は、自己評価も肯定的であり、家族・教師・友人等のかかわりもよい。特に、身近な家族とのかかわりでその傾向は顕著であった。また、教師や友人とのかかわりでは、学年との関連がみられた。

ここでは、以下のようにいくつかの点にしぼって考察する。

1 自己評価について

女子が男子より全ての設問でより否定的であり、特に、運動と容姿についての自己評価が著しく低かった。中学生の自己概念を調査した山本ら(2003)の研究では、スポーツと自分の見た目についての自己概念で、また、くもん子ども研究所(2000)の自己像調査でも「スポーツが得意」では、男子が女子より大きく上回っており、本調査も同様の結果であった。また、「2002年調査児童・生徒の性」によると、「男性又は女性でよかったと思っている」かどうかの認識には性差がみられ、受容できている者は高校男子72.3%、女子56.8%と男子が高い。女子の自己評価の全般的な低さについては、性受容との関連が考えられる。

2 家族とのかかわりについて

男女共に自己肯定感のある者が「家族とのかかわり」がよく、特に肯定感のある女子では日常生活での親とのかかわりが密接であった。女子に家族志向が強いことや男子より家族とのかかわりが多いことが指摘されている(モノグラフ 1999、柴田ら 2002)が、これは、少子化が進む中で一人っ子なら男を望む者が1982年には51.5%あったのが、1997年には女の子を望む夫婦が75%を占め、子どもに家の後継ぎを期待するより、かわいがり親しく付き合う相手、あるいは

介護の担い手として期待するという親側の思い(坂東、2001)と対になる状況と言えよう。

3 友人とのかかわりについて

自己肯定感のない者は友人に合わせるなど気を使い、特に男子では、自分から話しかけたり、異性と気軽に話すことができない。また、男子は肯定感の有無にかかわらず、一人にいる方が落ち着く傾向が強い。このことは、成績でも異性関係でも男子の方が女子より、競争心が強く、友達がライバルであり(モノグラフ1997)、その競争のストレスから、一人を好む傾向が出てくるものと思われる。

4 教師とのかかわりについて

教師とは挨拶や敬語の使用など表面的なかかわりしかもたない傾向にあるが、子どもたちは担任と儀礼的に付き合い、生身の人間として接触することが希薄である(くもん子ども調査基本報告書 1993)と指摘されていることと一致しており、自己肯定感のない者はその傾向が強いことが本研究で明らかになった。また、学年が上がるほど教師と子どもの交流は低くなるとの指摘もあるが、本研究では、男女共に3年で挨拶や敬語を使わなくなることと同時に、教師との会話や、悩みを聞いてもらうことへの否定感がやや薄れ、教師との距離が近づく者もあり、この傾向は自己肯定感のない女子に顕著であった。このことは、高校生と教師は「進路」という接点で結びつく(からざレポート 1997)の指摘があるように、高校3年は進路選択の時期であり、進路相談との関連が考えられる。

今後の課題

高校生段階での自己肯定感のある者は半数を下回っていたが、中学・小学生の発達段階での自己肯定感の推移と、それに伴う人とのかかわりの変化を明らかにすることが今後の課題である。

引用文献

- (1) 竹田レイ子他(2003): 自尊感情が学校内不安に及ぼす効果研究, 日本心理学第67回発表論文 2PM202
- (2) くもん子ども研究所(2000): 「自分」という存在, からざレポート1(1)
- (3) 山本ちか他(2003): 中学生の社会的行動についての研究(4)ー中学生の自己概念についての検討, 日本教育心理学会第45回論文集 p.337
- (4) 東京都幼稚園・小・中・高・心障性教育研究会編(2002): 2002年度調査児童・生徒の性, 学校図書
- (5) ベネッセコーポレーション(1999): 高校生の他者感覚, モノグラフ 高校生 56
- (6) 柴田玲子他(2002): 小学生における人間関係の発達の変容, 日本教育心理学会第44回論文集 p.488
- (7) 坂東眞理子編著(2001): 日本の女性データバンク, 財務省印刷局
- (8) ベネッセコーポレーション(1999): 高校生の競争観と共生観, モノグラフ 高校生 49
- (9) くもん子ども研究所(1993): 学校をめぐるコミュニケーション, 第3回くもん子ども調査基本報告書
- (10) くもん子ども研究所(1997): 学校の先生, からざレポート34